

アマリリス Amaryllis

静岡県立美術館ニュース

THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART



白雲たなびく青々とした富士をすつきりと伸びやかに描く。手前の樹叢の精緻な描写は、湿り気を帯びた柔らかい日本の自然を的確に捉えている。沼津江浦から描かれたことが、裏面に記された「伊豆国江浦港より富士山を眺望す画師 美好」という記述から分かる。ビゴアの油彩による風景画は珍しく、なかでも、本作のように富士を大きく捉えたものは、他に類例がない。

ビゴアは、一八八二年に来日し、十七年間という長い期間、日本に滞在した。その間、時局風刺雑誌『トバエ』を月に二回刊行するとともに、『ザ・グラフィック』『ル・モンド・イリュストレ』などの英仏の新聞の美術通信員として日本各地の事件や日清戦争取材した。

板に描かれた本作は、ジャーナリスト・風刺画家として活躍したフランス人ビゴアが、旅先で目にした光景を堅実な油彩画法でとどめたものである。「風景画家ビゴア」という意外な一面を窺わせる、貴重な油彩画の一点である。

(上席学芸員 泰井良)

No.
119
2015年度 | 秋 |

「怪物」・その後

―静岡県立美術館評価の現状と今後について―

田中 啓

静岡文化芸術大学 文化政策学部教授

本誌「アマリス」の2002年夏号（No.66）に、泰井学芸員による「美術館に『評価』という怪物がやってくる」という文章が掲載されている。この文章は、静岡県立美術館に評価システムという「怪物」が導入されることを高らかに告げるファンファーレであった。

この「怪物」（美術館評価システム）は、観覧者数の減少（平成11年度に開館以来最低値を記録）、県庁における予算のマイナスシーリング（概算要求時に前年度より一定率を減じたものを要求限度とすること）実施、行政評価試行結果に基づく近代文学博物館の閉館（東京都）といった事態を受けて、全国に先駆けて静岡県立美術館が導入したものである。その背後には、美術館運営の先行きに対する美術館や県文化政策関係者の強い危機感があった。

県立美術館評価システムは、平成13（2001）年度に約70の評価指標（ベンチマークス）を計測する方式でスタートし、平成15（2003）

年度には静岡県立美術館評価委員会が設置され、同委員会の提言を受けて、平成17（2005）年度からは、美術館による自己評価と第三者評価委員会による外部評価を両輪とする評価システムが確立し、現在に至っている。

その特徴を挙げれば、①美術館の主導による自律的な評価システムである、②美術館の使命・戦略に基づき評価が実施されている、③利用者アンケートを積極的に実施するなど、美術館活動を定量的に把握することに重点が置かれている、④多くの学芸員が評価の実施に関わっている、⑤評価結果が美術館のウェブサイト等により一般に公開されている、といった点である。

今や国・地方の行政組織においては、評価を実施することは「当たり前」とされているが、公立文化施設では、自主的に評価に取り組むところはいまだに少ない。冒頭で触れたように、導入時に評価システムが「怪物」と形容されたのは、これが美術

館に從來存在しなかった「異物」であることを強調するためであろうが、国内の公立美術館において評価が「異物」であるという事情は、いまだに変わらない。

さて、この「怪物」は県立美術館に何をもたらしたのであるうか。筆者は本年、当美術館の学芸員のほぼ全員と、評価について懇談する機会を得た。その席で学芸員からは、評価によって事業活動の結果が可視化され、業務改善につながったこと等のメリットが指摘される一方、評価の目的や仕組みが実態に合っていないのではないかと懸念も示された。当初、美術館運営の先行きに対する危機感から導入された評価システムは、事業活動を可視化することを通じて、職員自身による業務改善と県民に対する説明に貢献してきたと言える。しかし、美術館を取り巻く状況も美術館自体も変化を遂げているため、評価システムが現状に合わなくなりつつあるということであろう。今後の美術館評価システムのあり

方を構想する際には、以下に挙げる点が重要である。第1に、中長期的に県立美術館がどのような方向をめざすかという点である。昨年度の観覧者数が開館後最少を記録したほか、人口の減少、県財政の状況、美術館施設の老朽化等、美術館は新たな問題に直面している。こうした中で、将来に向けて美術館がどのような方向をめざすかによって、導入すべき評価システムのあり方も変わってくる。第2に、評価における関係主体間の役割分担のあり方である。美術館評価に直接関わっている主体は美術館、県（文化政策課）、第三者評価委員会の3者であるが、美術館協議会も館長の諮問に応じて意見等を述べる役割を果たしており、美術館の運営に関与している。現状ではこれらの主体の評価における役割分担が明確ではないように思われるので、この点を整理する必要があるだろう。

どのような評価システムを志向するにせよ、美術館職員がその目的や意図を理解し、前向きな意識で取り組めるようなものであることが望ましい。同時に、県立美術館が担っている公的な役割をより良く果たすことを支援するような仕組みである必要もある。現在の美術館評価システムも十分に先進的なものであるが、現状に合ったより有効な「怪物」に生まれ変わることを期待したい。

アーティストと出会い、感じる機会

ー夏休み子どもワークショップー

主査 石津 宏直

夏休み期間の八月十一日から十四日までの四日間、「スイスデザイン展」関連教育普及イベントとして「夏休み子どもワークショップ」うちの子どもデザイナー！が開かれました。

八月十一日・十二日の前半二日間は、講師に池ヶ谷知宏氏 (good bye market) をお迎えし、「これでいいのだ！やわらか発想ラボ」と題して講座を行いました。池ヶ谷氏は富士山や漢字をモチーフに作品をデザインされていて、どの作品も池ヶ谷氏自身のもつユニークさと温かさが形になったような、見るものを楽しい気分にしてくれるものばかりです。

今回のワークショップでは、池ヶ谷氏のアイデアがどんな風に生み出されるのかを子どもたちが理解できるように、池ヶ谷氏考案の発想トレーニングの数々に取り組みました。

暗号のような形にデザインされたひらがなを組み合わせて名札を作って自己紹介。富士山の形にくりぬいたルーペを制作して、美術館のまわ

りの景色をのぞいた「富士山探し」。(写真1) 作品タイトルを隠した状態のロダン館で、彫刻作品を実際に鑑賞しながら行った「タイトルを考えよう」。漢字の中に「×」を見つけて「○」にして新たな漢字の意味を生み出す「漢字の解剖」。

最初は緊張して固かった表情も、そしてきつと小学生たちの発想も、池ヶ谷氏の人柄と発想トレーニングでどんどんやわらかくなっていきました。

八月十三日・十四日の後半二日間は、講師に岡本光市氏 (共栄デザイン) をお迎えし、「ひらめき ハニカム プロジェクト」を開催しました。前半の「発想」に特化した内容

とは対照的に、後半のワークショップでは構想から作品作りまでのデザイナーのお仕事を、小学生が実践しながら理解できるような内容となりました。

まずは岡本氏の作品に実際に触れながら「デザイン」と出会う。今回の制作素材となる「ハニカム紙」を実際に作ることで理解をし、「スイスデザイン展」やロダン館の展示作品をアイデアスケッチして、作品イメージをひろげ、用途や材料の特性を考えながらデザイン決定。そして、丁寧な作業で自らの作品を形にしていきました。

制作中は作品の完成状態は見ずに、鑑賞会まで我慢という約束だったので、鑑賞会で一斉にみんなの作品が広がった時には、参加者の小学生たちから喜びの歓声があがりました。(写真2)

二つの講座で取り上げた「デザイン」という考え方は、小学校図画工作科の段階では、あまり扱わない内



写真2

容なので、低学年の小学生には難しすぎるかもしれないと心配していましたが。しかし、参加者の小学生たちは講師のデザイナーそれぞれから、考え方と、何より創作に対する熱意を感じ取り、どんどん活動にのめりこんでいきました。小学生の時期に「デザイン」を知識ではなく感覚として受け取ったなら、きっとこれからの発想や制作は豊かなものになっていくはずですよ。

静岡県立美術館の教育普及イベントでは、これからも参加者の皆様に、アーティストとの出会いから、技術だけではなく、その内側にある何かを感じ取る機会を与えられたらと考えています。



写真1

写真家の眼／版画の眼

6つのアンソロジー

平成27年11月8日(日)～12月9日(水)

しばらく前に、『舟を編む』という小説とそれを原作とした同名の映画がヒットし、話題となりました。今この文章をお読みいただいている方の中にも、ご存知の方が多いのではないかと思います。主人公は出版社の編集者。「言葉の海を渡る舟」である辞書を編む刻苦勉励の日々が描かれています。

ところで、何を今さらと仰る向きもあるでしょうが、美術館で展覧会を企画するという仕事も、前述の編集者の仕事に似ているのではないかと思います。すなわち、一定のテーマを決め、数多あるイメージの中か

らそれに沿った出品作品を選択し、展示室を構成して皆さんにお見せするという作業は、まさしく「編集」と言えるでしょう。扱う対象は、出版物の編集に携わる方々の場合は言葉であるのに対し、我々の場合はヴィジュアル・イメージという根本的な違いがあります。しかし、様々な約束事や決まり事を遵守しつつ、「編集」の仕方によって個性や特徴を出す、あるいは個々の差が際立つという点では、出版物も展覧会も同様ではないかと思えます。

前置きが長くなりましたが、本展は、当館のコレクションと個人コレクションのご所蔵品の中から、写真と版画の連作を中心として、十六世紀から現代まで、五カ国にまたがる二十人以上の作家を、以下の六つのパート（現時点での仮称）でご紹介します。

- 1 ドイツおよびその周辺―表現主義の版画と建築写真を中心に
 - 2 神話風景、そして神話の彼方へ
 - 3 オリエンタリズム―憧れの「東方」
 - 4 パリ―日常のひとこま
 - 5 ローマ／ローマ
 - 6 江戸・東京、東海道五十三次
- これら六つのパートはそれぞれ、

作家が創造／想像力を喚起された「場所」「物語」、そしてそれらを統合する美術史上の「運動」をめぐるキーワードを軸としています。場合によっては、時代・国・ジャンルも全く異なる作家同士を、これらのキーワードの下にご紹介します。〈オリエンタリズム〉のパートを例に挙げましょう。《ウジェーヌ・ドラクロワ銅版画集》は、外交使節団の一員としてモロッコに赴いたフランスの画家ドラクロワ（一七九八～一八六三）が、現地での見聞を元に制作した版画連作ですが、十八世紀から十九世紀に西欧で流行した東方趣味（オリエンタリズム）中近東や北アフリカ



ウジェーヌ・ドラクロワ
《ウジェーヌ・ドラクロワ銅版画集》より「後ろ向きの裸婦の習作」（当館蔵）



服部冬樹《オリエンタリズムのためのヌードⅡ（イスタンブール）》（個人蔵）

などの自然や風俗を主題とする絵画）と軌を一にしています。一方、服部冬樹（一九五五～）の《オリエンタリズムのためのヌードⅡ（イスタンブール）》は、水盤に流れ落ちる水を眺める、スカーフを被った後ろ姿の裸婦という演出が、ドミニク・アングル（一七八〇～一八六七）の《泉》やハーレムを主題とした《トルコ風呂》を連想させ、タイトルどおりオリエンタリズムへのオマージュのような写真作品と言えます。

本展は、一冊まるまる一篇の物語を収めたミステリーやファンタジーではありません。六つの小テーマの集合体としての展覧会、いわば六篇の短編小説を編んだような展覧会（六つのアンソロジー）です。展示室ごとに様変わりするゆるやかなイメージの連鎖という「編み方」をお楽しみいただけましたら幸いです。

（上席学芸員 南美幸）

「音楽の都」と言われるオーストリアの首都、ウィーン。この華麗な街に、十九世紀末、都市改造計画の一环として約二十年の年月をかけて美術館が建設されます。この際には金銭的・時間的制約は一切設けられなかったとされ、贅の限りを尽くしたその姿は、ルネサンスやバロックなどの様々な建築様式が織り込まれたきらびやかなものでした。ヨーロッパ

ウィーン美術史美術館展 —風景画の誕生—

平成27年12月19日(土)～平成28年3月21日(月・振休)



ルーカス・ファン・ファルケンボルフ《夏の風景（7月または8月）》1585年 油彩・キャンヴァス

パの主要美術館の一つとして今日名を馳せる、ウィーン美術史美術館の誕生です。ここに収められた数十万点におよぶ膨大なコレクションは、六〇〇年にわたりウィーンに君臨したオーストリア・ハプスブルク家の栄光の歴史を反映するものでした。歴代皇帝の趣味や趣向、審美眼によって選ばれた、ドイツ、フランドル、オランダなどの北方絵画の傑作やイタリア・ルネサンスの名作が、コレクションの核として、きら星のよう



ティツィアーノ・ヴェチエッリオ《タンバリンを演奏する子ども》1510-15年頃 油彩・キャンヴァス

にきらめいています。

ウィーン美術史美術館のこの豊かなコレクションには、ハプスブルク家が統治していたネーデルランド地方の、十五世紀から十七世紀にかけて「風景画」の黎明期といえる時代の作品も数多く含まれています。「風景画」は、今日の私たちにとって最も親しみやすい絵画表現のひとつですが、実はヨーロッパで風景が絵画

の中に取り入れられはじめるのは、十五世紀以降のことです。彼方の眺望を見渡すかのように開かれた室内の窓の描写を通じてのことでしたが、風景表現はこれをきっかけに、聖書や神話の世界の舞台として次第に生き生きとした表情をみせるようになっていき始めます。そして十七世紀を迎えると、もはや物語の舞台

ではない独立した主題として取り上げられるようになり、さらにさまざまな分野にも分かれていくようになります。とりわけこの頃のオランダを中心とした文化圏では、身近な風景がそれぞれの画家の感性よってみずみずしくとらえられ、人物の描写を含まない純粹な「風景画」の誕生に大きく貢献することになりました。そして、こうした歴史を紐解くには、ウィーン美術史美術館の風景画のコレクション群は最適と言えるのです。

「風景画の誕生」の副題を冠した本展では、ウィーン美術史美術館が誇る風景画の作品群から、パティニール、ファルケンボルフ、ティツィアーノ、カナレットなどの巨匠をはじめとした名作、約七十点を選びめぐり、十五世紀から十八世紀中ごろまでの「風景画」成立の過程を辿っていきます。珠玉の作品が織りなす「風景画」誕生の物語を、ぜひお楽しみください。

(学芸課長 三谷理華)

ラファエル・コランと美術行政 —セーヴル国立製陶所関連資料を手掛かりに

学芸課長 三谷理華

一八七二年七月二十六日、フランスのセーヴル国立製陶所に、一つの委員会が新たに設置された。この日に発令された教育宗教美術省令の第一条には、次のようにある。

「セーヴル製陶所でなされた陶磁器の仕事、を、芸術の観点から、吟味し評価するために、五名からなる委員会を設置する。

この委員会は、各四半期の終わりに製陶所本部に参集し、議事録にも残す所見結果を、施設の運営管理側に伝える」。

十九世紀半ば、セーヴル国立製陶所は美的感覚の欠如を批判され、これに一八七〇年の普仏戦争による製陶所の荒廃が追い打ちをかけていた。だが、一八七一年にルイ・レミー・ロベール（一八一〇—一八八二）が製陶所長（administrateur）に任命されると、いわゆる「ルネサンス」の時代が幕を開け、再生の動きが開始されるが、一八七二年設置の「セーヴル国立製陶所改良委員会（Commission de perfectionnement de la manufacture nationale de Sévres）」[以下、「改良委員会」と略記]は、それを象徴的に告げるものであった²。この委員会は美術長官シャルル・ブラン（一八一三—一八八二）を委員長に五名の委員で構成されたが、一八七四年六月十九日の教育宗教美術省令では美術長官フィリップ・ド・シュヌヴィエール公爵（一八二〇—一八九九）を委員長に十三名の委員会へと拡大³。一八八四年には、教育美術大臣アルマン・ファリエール（一八四一—一九三二）自身を委



図1 セーヴル国立製陶所資料室の入っている建物

為し、新たな技術や素材、様式の導入に取り組み、セーヴルの「ルネサンス」が遂行されていくのである。

さて、この改良委員会には、画家ラファエル・コラン（一八五〇—一九一六）も一時加わっていた。一八九九年にレジオンドヌール勲章オフィシエ章を受勲した折、勲位局に提出した略歴の中に「セーヴル国立製陶所改良委員会委員」と記しているのだ。だが、それがいつ頃だったかといった詳細な記載は、そこには無い。

実のところ、コランと改良委員会との関わりを具体的に示す資料は、現在のところ殆ど確認されていない。この状況に鑑みれば、セーヴル国立製陶所資料室（図1）が保管する一八八九年七月九日付の美術長官の製陶所長宛書簡（図2）にある記載は、ほぼ唯一のものとして極めて貴重であり、かつ内容面でも興味深い。以下、拙訳により全文を引用する。

「一八八九年七月九日 パレ・ロワイヤル

員長に十九名の委員で構成されるようになって⁴いる。改良委員会が時とともに重要性を増していったことがうかがわれるが、製陶所は実際、委員会の提言の下様々な改革を

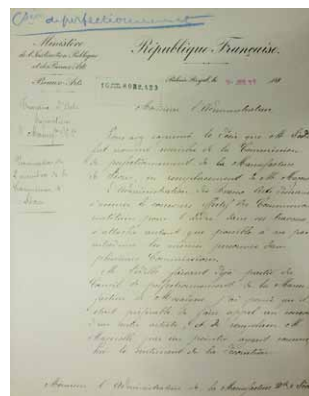


図2 1889年7月9日付、美術長官のセーヴル製陶所宛書簡1頁目（セーヴル国立製陶所資料室蔵）

所長殿
マズロール氏の後任として、セディュー氏をセーヴル製陶所改良委員会委員に任命することを、貴殿は望んでおられました。

美術省としては、業務上の助力を得るために設けられている諸委員会の実質のある協力を確たるものとすることを望むがゆえに、同一人物を複数の委員会に極力組み入れないよう希望しています。

セディュー氏は、すでにモザイク製作所改良評議会に参画しており、別の芸術家の協力を求めるのが望ましく、マズロール氏の後任であれば、氏のように裝飾感覚をもった画家とするのが好ましいと考えました。

したがって、私はラファエル・コラン氏の任命を提案し、大臣閣下はこの選択を承認なさいました。

加えて、セーヴルの委員会には鉱物学者を入れるのが有益ではないかと考えましたので、追加委員として、高等師範学校の鉱物学准教授であるデュフェ氏の任命を提案しました。

この提案も、七月五日付の省令で同じく

承認されました。

所長殿、私の格別なる敬意を確かなものとお受け止め下さい。

美術長官「署名」G・ラルーメ⁶。

これによれば、コランの改良委員会参画は一八八九年であったことが判る。この時の美術長官は、署名にもある美術史家のギユスターヴ・ラルーメ（一八五二—一九〇三）。製陶所長は、製陶家のテオドール・デック（一八二二—一八九一）である。デックは、ジャポニスムの陶磁器を手がけたことや、共同制作者として多数の画家に絵付けを依頼したことで知られる。コランもその一人であり、一八七〇年代からデックの下で絵付けした作品を残した。このデックの所長時代にコランが改良委員会委員を務めたのは、一見、自然なように思われる。だが面白いことに、デックが推したのは建築家のポール・セデーユ（一八三六—一九〇〇）であり、コランを推薦したのは美術長官自身であったと書簡は伝えている。しかも、画家アレクシス・ジョゼフ・マズロール（一八二六—一八八九）の後任としてである。この年死去したマズロールは、改良委員会発足時から古参委員であった。その後任に、ラルーメは、当時三十代のコランを当てたのである。ある種の抜擢とも言えるこの人事は、何故だったのか。これを考えるにあたり着目したいのは、ラルーメが、後任には「装飾感覚をもった画家」が好ましいとしている点である。コラン同様アカデミスムの画家であったマズ

ロールは、コメディー・フランセーズ天井画（現存せず）などの公共建築装飾画で名を馳せていた。そしてコランも、一八八〇年代後半から、公共建築装飾画を本格的に受注し始めている。一八八八年には、ソルボンヌ大学学長食堂のための装飾画《晩夏》（現存せず）を制作し、同年サロンでお披露目した。翌年は、コランがセーヴルの改良委員会委員に任命された年だが、四月十八日付教育美術省令によりオデオン座小フオワイエ天井画（現存せず）の発注を受けている。この発注と制作初期段階には、一八八八年から九一年まで美術長官を務めたラルーメも深く関与していたことは、国立公文書館に残されるコランとのやりとりの記録からうかがわれる。また、ラルーメの長官在任中には、いずれも最終的には個人所蔵家の手元に渡るものの、一八八九年と翌年の二度にわたり、コランのサロン出品作の国家買上げ申し出があったことも国立公文書館の記録は伝えている¹¹。

これらの記録を手掛かりにすれば、次のような推察ができる。つまりラルーメは、装飾画家ないしは画家としてコランに一定の評価を与えており、その後ろ盾により、コランは国家からの発注やセーヴル国立製陶所改良委員会委員の委任などを得た面があったのではないかとすることである。黒田清輝はじめ日本人の弟子たちはしばしばコランを欲の無い清廉の画家として語った。だが、こうした美術行政との繋がりは、コランの別な一面を垣間見せ、新鮮な驚きさえ感じさせる。

1 Copie de l'arrêté du ministère de l'Instruction publique, des Cultes et des Beaux-Arts daté du 26 juillet 1872 [abrégé ci-après, Arrêté 26071872]. Archives de la manufacture nationale de Sévres [abrégé ci-après, ASJ, Série U, Carton U33, Liasse 3.

2 以下の動向については、以下の論考を参照のこと。

Yuko IMAI, «Les Coulisses de l'Exposition Universelle de 1878 à Paris : la Manufacture de Sévres et le Japon», *Bulletin de la Société Franco-Japonaise d'Art et d'Archéologie*, n° 31, 30 juin 2012, pp.73-97.

3 *Rapport adressé à Monsieur le Ministre, par M. Duc, membre de l'Institut, au nom de la Commission de Perfectionnement de la Manufacture nationale de Sévres*, Paris, Imprimerie Nationale, 1875, pp.5-6.

4 *Rapport adressé à Monsieur le Ministre, par M. O. du Sortel, au nom de la Commission de Perfectionnement de la Manufacture nationale de Sévres*, Paris, 1884, p.2.

5 Lettre de Collin au secrétaire général de la Grande Chancellerie de la Légion d'Honneur datée du 5 septembre 1899, Archives Nationales [abrégé ci-après, AN], 10569097.

6 Lettre du directeur des Beaux-Arts à l'administrateur datée du 9 juillet 1889, AS, Série U, Carton U33, Liasse 3.

7 以下の点に「こづば」以下を参照。
福岡市美術館編『ラファエル・コラン』[図録] 西日本新聞社、一九九九年、五十一—五十二—一六五—一六六頁。

8 Arrêté 26071872, AS, Série U, Carton U33, Liasse 3.

9 Arrêté du ministère de l'Instruction publique et des Beaux-Arts daté du 18 avril 1889, AN, F/21/2066-2067.

10 これらの記録文書は、AN, F/21/2066-2067の分類番号で保管されている。

11 Lettres de Collin au directeur des Beaux-Arts datées du 29 avril 1889 et du 4 mai 1890, AN, F/21/4300.

一八八九年のサロン出品作《青春》（現所在不明）は外国人愛好家が、一八九〇年のサロン出品作《思春期》（一八八九年、ランス美術館蔵）はアンリ・ヴァニエが購入した。



本の窓

須藤弘敏・矢島新著
『かわいい仏像
たのしい地獄絵』

バイインターナショナル 二〇一五年

「かわいい」をキーワードに日本美術の名品を紹介する本や展示が最近いくつかありました。同書もそんな試みのひとつだろうと目星をつけて頁を開きました。読んでみるとひとと味違いました。なにしろ、いわゆる名品がほとんど出てこない。

江戸や上方のきつちりした造形規範が及ばない遠方の土地で、ひとびとの宗教感情はどのようなかたちとして実を結んだのか。それが本書のテーマ。ゆるくてあまり怖くない閻魔大王や鬼たち、責めさいなまれながらどこか楽しげな亡者たち……。ユーモラスな表現はときに稚拙さえあります。ですが、そこには高度に洗練された高尚な仏教「美術」にも劣らぬ真摯な思いの「かたち」があるのではないのでしょうか。

（上席学芸員 村上敬）



美術館、はじめの一步の粘土教室

美術館教室アシスタント 岡田友里香

「1トンって分かるかな。動物園のキリンと同じくらい重さだよ。」

粘土教室に来た子ども達がインスタラクターの呼びかけに目を輝かせるこの瞬間は私が手を務めた5年間、少しも飽きることがありませんでした。

実技室にある1トンの粘土をつかう床の上での制作体験は感慨も一入です。

大量の粘土を目の前に、抱えきれない量を持つていく子ども、少しの粘土で満足することも、周りに合わせることもと多種多様です。それぞれこどもの苦手と得意に触れながら制作を進めますが、特に大量の粘土を持つていく児童はバワフルで、スタッフやボランティアによる粘土の追加が追いつきません。



粘土を楽しむ子ども達

そこで粘土を運ぶだけではなく「何かつくってみよう」と大人が呼び掛けますが、自分の体よりも大きな粘土で何をつくればいいのか、子ども達の多くは戸惑います。スタッフが順番とばかりに大きな動物の胴体をつくり始めます。きっかけを得た子ども達はすぐに「つくらせて」と寄ってきてすごい勢いで、自分のちからで完成させます。同じ粘土の塊が、作り手次第で強そうな歯を持つライオンになり、蛇のように長い鼻のゾウになり、細かい鱗のドラゴンになって見る者の頭に焼き付きます。

自分達で完成させた粘土の動物に座りながら、満面の笑顔の子ども達がつぶやく「粘土って楽しいね」という一言が実技室の魅力であり自慢です。そして子ども達は粘土ではなくこの思い出を持ち帰るのです。

当館で粘土教室が導入されてからもう十数年が過ぎます。初期の粘土教室に参加していた子ども達が次の世代を連れて美術館に来られる頃ではないでしょうか。美術館への入口にもなり得る粘土教室を、遊びにくる未来の大人達にこれからも繋げていってください。

利用案内

開館時間：10:00～17:30(展示室への入室は17:00まで)
休館日：毎週月曜日(月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館)

アクセス

- ◎JR「草薙駅」から静鉄バス「県立美術館行き」で約6分
- ◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約3分
- ◎東名高速道路 静岡I.C.、清水I.C.から約25分
- ◎新東名高速道路 新静岡I.C.から約25分

テレフォン・サービス：054-262-3737
ウェブサイト：<http://www.spmoa.shizuoka.shizuoka.jp>

無料託児サービス
毎週日曜日および祝日10:30～15:30
対象 6ヶ月～小学校就学前

※イベント等は都合により変更になる場合があります。
※詳細は美術館学芸課までお問い合わせください。
(Tel: 054-263-5857)



風景とロダンの 静岡県立美術館

〒422-8002 静岡市駿河区谷田53-2
総務課/Tel 054-263-5755 Fax 054-263-5767
学芸課/Tel 054-263-5857 Fax 054-263-5742

表紙の作品

ジョルジュ・ピゴ
(1860-1927)
万延元年-昭和2年)
《富士(沼津江浦)》
板、油彩
24.0×58.0cm
1885-1887年頃
(明治18-20年頃)



徳川家康公顕彰四百年記念 ムセイオン静岡・グランシップ 静岡×徳川時代

徳川(江戸)時代の静岡県をテーマ芸能・文化のジャンルに注目した連続講座です。1講座単位のお申し込みもできます。

10月24日(土)14:00～
会場 グランシップ9階910会議室
鈴木 大治(あべの古書店店主)
「静岡と山田長政がつなぐ書物」

11月14日(土)14:00～
会場 グランシップ6階交流ホール
宝井 夢星(講師)、柳亭 市馬(落語家)、松山 うめ吉(俗曲)
「グランシップ寄席」

12月19日(土)14:00～
会場 グランシップ10階1001会議室
松井 今朝子(直木賞作家)
「旅の人 十返舎一九」

1月16日(土)14:00～
会場 静岡県立美術館講堂
芳賀 徹(静岡県立美術館館長)
「徳川日本の美術と博物趣味」

お問い合わせ・お申し込みはグランシップチケットセンターまでご連絡ください。
電話 054-289-9000

友の会のご案内 入会は常時受け付けています。会員特典など詳細は、友の会事務局(Tel.054-264-0897)にお問い合わせください。